様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００８９

研究課題名（和文）日本におけるイスラーム法学の先駆者アフマド有賀文八郎;の原資料の研究と整理

研究課題名（英文）Study and arrangement of the original materials of Ahmad Ariga Bunhachiro, a pioneer of Islamic theology in Japan

研究代表者
四戸　潤弥（Shinohe, Junya）

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：８０３６７９６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：明治開国を契機に、外国宗教との折衝が可能となり、イスラーム教への入信も可能となった。それまでの宗教は個人の選択というよりは、地域社会の宗教の受け入れと、儒教の橋梁主義であったが、明示期には、個人が外国との交流により、自らの宗教を選択できるようになった。この開かれた世界のなかで、日本人は信仰への追求ではなく、外国人との交流により自然に新たなる宗教へと導かれていった。アフマド有賀の場合は、最初は来日したキリスト教宣教師からであったが、自らが海外へと向かい、そこでの交流がアジアであったことがイスラーム信仰の契機であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
明治開国を契機に、外国宗教との折衝が可能となり、イスラーム教への入信も可能となった。それまでの宗教は個人の選択というよりは、地域社会の宗教の受け入れと、儒教の橋梁主義であったが、明示期には、個人が外国との交流により、自らの宗教を選択できるようになった。この開かれた世界のなかで、日本人は信仰への追求ではなく、外国人との交流により自然に新たなる宗教へと導かれていった。アフマド有賀の場合は、最初は来日したキリスト教宣教師からであったが、自らが海外へと向かい、そこでの交流がアジアであったことがイスラーム信仰の契機であった。

研究成果の概要（英文）：PDF of student notebooks of his proof and comment on the Japanese translation of Quran was a main purpose of this research. As a peripheral study, I collected information of Ahmad Ariga ’s Family and his relatives. During the research, his descendant family and the relatives together replaced tombstone of Ahmad Ariga, it was confirmed that Ahmad Ariga helped his relatives financially and introduced his relatives to people concerned in the social life and their studies. I got materials which proved his business relationship with Sun Yat-sen's secretary, Song Ying Jin, who was assassinated in the Chinese Revolutionary Movement. It was concluded that Ahmad Ariga converted to Islam through contact with Muslims in Asia in his foreign business as his confession. It is natural way through his business relationship in Muslims in Asia. I would like to express my deepest gratitude to the Japan Society for the Promotion of Science for granting research funds.

研究分野：イスラーム

キーワード：アフマド有賀　香蘭経翻訳　イスラーム信仰　日本におけるイスラーム布教　明治大正昭和のイスラーム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

明治以後の時代、日本人として2番目にイスラーム教徒となったのアフアド有賀こと、有賀文八郎であった。彼は志高く、事業への意欲も旺盛な若者であったが、最初小学校教員になるも、日本人のキリスト教への関心が、西欧文明と結びついていると感じていた一人であったが、単なる興味にとどまらず、全生活をキリスト教布教へと駆り立てた。その詳細はこれまで明らかになっていなっていなかった。

明治元年に生を受けた有賀文八郎は、信仰への関心と同時に経済的自立を強く意識した。このため、ビジネスと宣教をバランスよく維持することを専らにした。

こうした彼の宗教的姿勢は、世俗を捨てるのが宗教の本質であると思いがちな日本人からは、彼の信仰への真摯な心は理解されなかった。

また信仰学も、世俗と離れてこそという日本人の宗教学への態度もあり、有賀文八郎の信仰学分野での探求心も評価されなかった。

このため、アフマド有賀は世俗的在野のビジネスマンとして見られ、彼の著作の正当な評価は得られなった。

またアフマド有賀の著作に「禁酒」に段階的対応は、教義軽視という観点から、似非イスラーム教徒と断罪されるに至っている。しかし、彼のこうした対応は、伝統的イスラーム教徒学者に沿ったものであった。それは彼がイスラーム教徒と深い交流があったからである。彼の交流は入信したインドにおいての学者との交流、日本にあっては在日イスラーム教徒との交流と、日本のイスラーム布教における彼らとの協力があったからである。協力とは具体的は、日本で最初の神戸モスク建設での登記人に名前を連ねていることが分かる。さらに彼のムスリムとして墓地は神戸の外人墓地に設けられたが、それは在日イスラーム教徒との深い交流なしには実演できなかった。

ビジネスマンとして、イスラームへの支援は在任ムスリムたちの支援を強化するものであった。

アフマド有賀は英語が堪能で、成功したビジネスマンであり、日本社会でも信用される人であった。そういう人物が宗教布教に参加したことは、世俗を捨てて信仰や布教に専心する日本人の宗教象とは違っていたため、評価が低かったが、クルアーン和訳の校訂の自筆ノートの PDF はそうしたイメージを是正する。彼自身がクルアーンの和訳、あるいはクルアーンの解釈訳が行える学識を有していたことを証明する。

明治の知識人が経済的自立をもって、宗教布教へ邁進した姿は宗教と世俗のバランスが可能であることを示すものではないか、そうした問題も提示して研究を開始した。

有賀文八郎は、多くの日本人イスラーム教徒の中になっては世俗的成功を収めた点において異彩を放つ。彼以外の多くムスリムは、日本人の宗教観にあった、世俗的成功の可能性を否定したものだったからである。

また彼の妻、子、孫や親戚たちは熱心なキリスト教徒であった。イスラーム教徒はキリスト教の妻を妻帯することは許されている。しかし親子となるとどうであろうか。あるいはあったろうか。それは本研究の目的ではないが、ここで触れなくていけないことは、彼の息子は、米国組合派のキリスト教徒であった。さらに米国留学し、帰国後、同志社大学でキリスト教神学を教え、同神学部学部長となり、その後、京都大学へ教授として移籍し、キリスト教神学を教えた有賀鐵太郎であった。そして鐵太郎の子は牧師となっている。有賀鐵太郎がキリスト教学者になったのことと、父文八郎の関係はどうであったかについては、鐵太郎の記事から推測できる。家には神棚がなかったのである。これは戦前のキリスト教徒が同様の発言をしている。有賀家の場合は、父文八郎がユダヤ教、キリスト教系譜に位置づけられる唯一神教であったことから、最初からなかったのであり、それが子鐵太郎に一神教のどちらかを選択するという極めて特異な環境を提供していたと推測される。

また明治の親子と例に漏れることなく、子鐵太郎は父文八郎を長男として支え、同居し、イスラーム教徒としての父の墓地を建て、供養している。先の述べたように在日イスラーム教徒が建立して墓の他、有賀家の青山墓地の墓へ埋葬したのである。また異なる宗教であったが、子鐵太郎は父を通じて、宗教間の対話を重視し、センター設立運営に参加している。

こうした文八郎家族を取り巻く、宗教学、そして孫娘がキリスト教音楽教師になるなど西欧音楽への関心も高い有賀家は、知的な一族であった。こうした側面は考慮されることなく、世俗の、そして在野の一人の日本人イスラーム教徒として理解されてきた。

クルアーン和訳校訂自筆ノートの PDF 化は、過小評価されている有賀文初郎、アフマド有賀の正当な評価に役立つものと考え、研究を開始した。

２．研究の目的

クルアーン翻訳の自筆校正ノートは、日本人の明治、大正、昭和（戦前）のイスラーム布教、および在日外国人イスラーム教徒との関係を明らかにする資料となるので今回、提供できる態

勢が整える。これ以外に学者や宗教家でない、在野の日本人イスラーム教徒の研究は必要である。日本のイスラーム研究者たちが、イスラーム信仰を持たない研究者の多数で占められているが、在野の日本人ムスリムたちも、特に明治期は教育のある者、また知識人階級の人たちが多いという事実と軽視すべできない。日本のイスラーム学に欠けている信仰を基礎として信仰者の学者による研究の成果をまとめることも必要であり、本研究はその一つである。

３．研究の方法
(1)自筆原稿、及び日記を解読
(2)遺族の元にある資料収集
(3)遺族へのインタビュー
(4)出版著作の収集と評価
(5)香蘭経日本語訳の自筆校訂ノートの PDF 化

４．研究成果
(1)自筆原稿、及び日記などの存在確認を遺族方々と確認できた。それを通じてアフマド有賀の実生活が新たに明らかになった。具体的には、中国でのビジネスでは孫文の秘書と接触し、公営競馬開催権の入手など、ビジネスとイスラーム布教と両立を図っていた。
(2)入信前のキリスト教宣教師との共同生活と、日本ガイド役など宗教布教に元来熱心であったが、そのための生活自立を重んじていた。
(3)英語が堪能であったが、クルアーン和訳では、当時翻訳家であった高橋五郎に依頼したが、自ら校正した。キリスト教聖書の知識を有していたことがクルアーン翻訳に影響があった。
(4)妻、子、そして遺族である孫たちは敬虔なクリスチャンであったし、現在もそうであるが、彼は家族の中で、一人イスラーム教徒で在り続けた。
(5)クルアーン翻訳の自筆校正ノートは、日本人の明治、大正、昭和（戦前）のイスラーム布教、および在日外国人イスラーム教徒との関係を明らかにする資料となるので今回、提供できる態勢が整った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 四戸　潤弥	４．巻 17
２．論文標題 イスラームにおける男女平等の一考察　-夫と妻の離婚権の構造分析を通じて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 シャリーア研究　拓殖大学イスラーム研究所	６．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 四戸　潤弥	４．巻 17
２．論文標題 クルアーン第22章巡礼の章　第30－57節	５．発行年 2021年
３．雑誌名 シャリーア研究　拓殖大学イスラーム研究所	６．最初と最後の頁 151-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 四戸　潤弥	４．巻 16
２．論文標題 アジアにおけるムスリム・マイノリティのイスラーム復興	５．発行年 2021年
３．雑誌名 一神教学際研究（JISMOR）	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 四戸　潤弥	４．巻 15
２．論文標題 イスラーム法理学におけるハラールとハラーム	５．発行年 2019年
３．雑誌名 シャリーア研究	６．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 四戸　潤弥	4．巻 15
2．論文標題 『クルアーン』第20章1－35節解釈	5．発行年 2019年
3．雑誌名 シャリーア研究	6．最初と最後の頁 203－222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 四戸　潤弥	4．巻 15
2．論文標題 イスラーム法理学におけるハラールとハラーム	5．発行年 2019年
3．雑誌名 シャリーア研究第	6．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 四戸　潤弥	4．巻 83－2号
2．論文標題 一神教系譜のイスラーム	5．発行年 2021年
3．雑誌名 基督教研究	6．最初と最後の頁 1，18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 四戸　潤弥	4．巻 18
2．論文標題 イスラームにおける自由意思の検討-婚約の撤回権を通じて-	5．発行年 2021年
3．雑誌名 シャリーア研究	6．最初と最後の頁 1，18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 四戸　潤弥	４．巻 18
２．論文標題 クルアーン第24章御光章第11-31章	５．発行年 2021年
３．雑誌名 シャリーア研究	６．最初と最後の頁 101,122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 井筒俊彦とイスラーム学
３．学会等名 日本宗教学会第79回学術大会（9月18~20日）Zoom、駒沢大学主催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 記法、表記、読みにおけるアラビア語教授法
３．学会等名 The 1st　Asian Arabist Academic　Confence Riyadh, SaudiArabia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 イスラーム法理学におけるハラール概念
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 “Deepening Belief in Islam with the Divine's Directing of Virtue: An Examination of the ‘Three Fundamental Principles of Islam’ by Muhammad bin Abdul-Wahhab
３．学会等名 hird Shin Buddhism-Christianity-Islam Trialogue: Salvific Action,Session 3: Amida’s Directing of Virtue: Grace, Justice, and Moral Life,A Muslim Perspective, Georgetown University, Washington,U.S.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 『クルアーン』ター八‐章20:1-35」
３．学会等名 「タフスィール公開研究会」,拓殖大学、東京
４．発表年 2018年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 「イスラーム信仰深化構造とワッハーブ『三つの原理』」
３．学会等名 日本宗教学会第７７回学術大会、大谷大学、京都
４．発表年 2018年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 “Silk Road od Japan via China in the 7th Century and the concepts of Grace, Islam, and Muslim in the Ibadi Doctrine”
３．学会等名 The 9th Conference on Ibadi Studies Beijing University, Peking,China（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 The Japanese Women and the Relgious Thought in Japan
３．学会等名 The 8th Confernce of the Religous Vaulues, Cario University（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 四戸　潤弥
２．発表標題 イスラームにおける夫と妻の離婚権と婚資における男女平等の考察
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 日本のイスラームとクルアーン編集委員会	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 194
３．書名 日本のイスラームとクルアーン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関